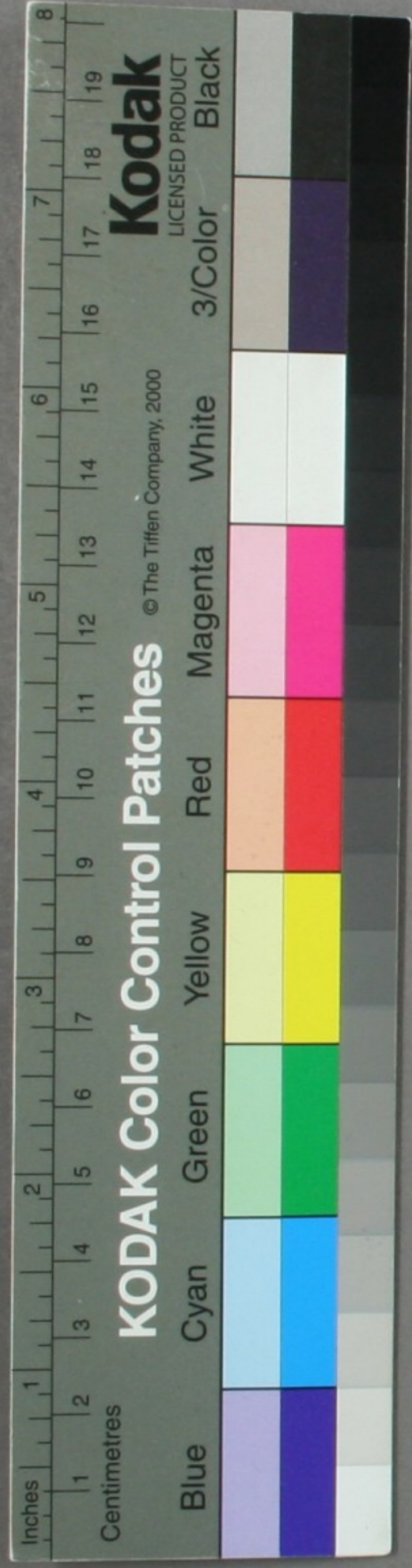




特別
48
467
6



467
6



和漢船用集卷第七

軍船之部惣論

太公望^{タウ}六韜^{ロウ}兵道^{ヘイダウ}曰故聖王^{ガウ}號^{カウ}兵^{ヘイ}為^{タス}凶器^{ケウキ}不得^{メエ}已^{ヤム}
而用之^{モチユ}老子曰兵者不祥^{シヤウ}之器非^ス君子之器^{コノ}不得^ス
已^{ヤム}而用之^{ヤム}孔子軍旅^{リョ}之事未^ス之學^{マナバ}之のたまへと
聖人何^ニそのこと^ニ知^ルらんや天下國家^{テンカ}を治^スむるに
何^ニそ必^ズしも兵^{ヘイ}を用^フふこととせん^ニんれども^ニ兵^{ヘイ}を治^スむるに
さうことあり故^ニに軍^{リョ}學^{ガク}よ七書^{シショ}及^ツ諸家^{シヨカ}に兵書^{ヘイショ}を
氏^シを懼^スは武具^{ブコ}兵器^{ヘイキ}あり世^ヨはおもふに軍用^{リョウヨウ}兵^{ヘイ}
備^ビの常^{ジョウ}也其^ミ殺^{コロス}わくん^ハあらん^ハに

本邦軍船の始



神日本盤余彦命日向の國を渡れりセンカンより我艦を
 起ヲコしたまひぬ列中國とたけ大和の國長脚彦ナカスチヒコと亡
 死シより發ヲコツて 景行天皇西南の賊ツク伐ウチる皇船
 日本武尊海川上の鳧タケル師と亡死又東夷征伐の兵船と
 仲哀天皇統ツク世レ終クミツ終ツと討たす御舟
 神宮皇后三韓退治軍船有河海に於其制セイり
 古事紀曰大雀命宇遲能ウチネ和紀郎子曰其兄大山守命
 渡河之時船楫と具鏑ササ佐那葛サカの根ネと春ツキこ汁シユの漬
 ぬきを取てそ船中フナナカに簀ス埒ラと陰カゲへ一ヒトをツマとタし
 と又漢ミナの八ヤチ船フネは魚膠ニカワすことりヲ緒レ葛亮カク曹
 操ソウの数万艘の大軍連環レンガンは謀ハカリとて赤壁ヒヤクの下は焼討ヤキウチに

本邦天慶の乱は官軍右衛門尉慶幸大藏丞春實
 軍と發スミトモ一絶ツク友セシ賊ハカ船タと結フキぬの仲ヤキ焼討ウチせり夫よりい
 來源平の合戦義経は梶原系時討死後より口國へ渡
 海の時梶原船は逆撥サカロと云々義経用と云はれ梶原は
 九軍八寸は進スミて尺は退ヒラキ退ヒラキ退ヒラキひきと云々夫よりい
 高コちよりいより武コレ徳志ビシと云々武リ船ヤウ船ウ船セシの船ヨウ
 へ一志ヒトふけ海ウミ八元ヤチ唐タカラのはよして今宝曆よりて九
 又百七十余年バウケンキ第元儀武備志の作ハ明ミシ天啓元年也
 市邦元和七年は南ミナトなりを武セツ船フネの院大學エニキ術義補カは
 の事といへとも是又明の成化二十三年は著チキされハ武
 徳志と八百三十五年はあられとも術義補の世は

仍れさる二百餘年以ふのこゝれは西戎船を以て
あつたあつた

本邦を以て船を以て送ることを司とて入る
この船は西戎法に倣ひ送り又各處に於て石
橋山の合戦破るゝに於て板山より七條にて渡れ
まひまゐる船より小船はめされあふ上縁のあへり
船より入る倭船の先陳大庭より一ふ余船は
と押さへる船はあふくんはむりく討死す
志願しん母つらふ小船ははるる係家母奥の基業
とあり船より入る船はあふく船の使すゝるは
足利氏氏教万艘は軍船はあふく船より攻めて

と下を掌握するより義輝は義昭の軍の法は
と天下又大に亂れ時より西國四國列は及
東海は海より入る船はあふく船の法は
法はと備を役船の法は又異なり元儀は白飛船國艦
戦于水者也と陸戦は車馬と用水戦は舟船と用一
定は制也越絶書は曰盧子見目は見て敢て船軍
の法はと何如伍子見目は曰船はと大翼小翼突昌
樓船橋船と名付船軍は教陵軍の法はは
乃を以て用へる大翼は陵軍の重車は當小翼は
陵軍の輕車は當突昌は陵軍は衝車は當橋
船は陵軍の輕足蹕蹕母當といへる晉令は曰水戦は

飛雲舟蒼隼船先登船飛鳥船ヒウニシウサクシユンセン セントウセン ヒテウセンなり呉志は曰タイフ傳フ諸葛略制シヨカクカクセして鴨頭船カフトウセンを修ツクる凡海河江洲ヲヨリカイカコウコの防フセキをモツラ守モと一水賊水軍スイザクスイクンの法ホウと一軍船イクンセンの制セイと論ロンす
 者茅元儀ハウゲンギ版經バンキョウ光莊クワンシヤウ渭陽ウヱイヨウ毛希秉モウキヘイ葛雅川カクヤケン等トウ其シ法ホウを弛ヒせり 本邦七海賊衆ホンポクシカイザクシュウ及韓流カンリウ全流ゼンリウなり又
 徂徠先生ソライ水法スイホフを論ロンし強信流ケウシンリウ北条流ホウテウリウ山麻流ヤママガリウの軍イクンをアサクラセウケンと引論インロンは曰イハク朝倉小軒アサクラセウケン島津家シマヅケンより合力カフリキョクを以モて
 大方中國西國オホカタチユウグニクの舟軍フナイクンの弛ヒを濫ラン信流ケンシンリウはかへるる
 へ一又曰イハク日本ニッポンハ海國カイコクなりハ東國トウコクより水軍スイクンを興モトメへき
 若ニハされとも其シ法ホウを修ツクるるハ舟軍フナイクンを修ツクるなりと又
 日本ニッポンハ拙ツタナクて大船オホフナを修ツクる法ホウを知シるるなりと又

しり是東國トウコクハ拙ツタナクハ舟軍フナイクンの修ツクるるを日本ニッポン紀キは曰イハク
 齊明天皇四年夏四月阿倍臣アヘノミコ船師フナイクシ一百八十艘ソクを率ヒキヒて
 蝦夷エゾを伐ウツ又新田義貞ニツタヨシサダ越前金ヶ原エチゼンカサキの築城ロウシヤウに對トキて
 塩冶判官シヅメハツカン高貞タカサタ出雲伯耆イツモハクキ乃セ勢セ三子余孫ヨキを率ソクて
 五百艘ソウを率ソクて海上ウミより押オシすより一イツアムへり又
 武田勝頼タケタカツノリ北条氏直ホウテウウチナヲ合戦カッセンの時トキハ系ケ家ケ北カ海賊カイザク梶原武田方カキハラタケタカタ
 にはラハニ漢カンの某ナニカありけりニミヤムカイ又日本ニッポン拙ツタナクといへりハ舟軍フナイクンあり
 海賊カイザク收セウ斃セキ船センとあり伊豆相模イズサカミ駿河表スルガフタより舟軍フナイクンあり
 倭ヤマト兵ヘイ者モノ勢セ州シウ長チヤウ壽シウ責セキの軍イクンあり又日本ニッポン拙ツタナクといへりハ舟軍フナイクンあり
 と修ツクるる安ヤスく大船オホフナを修ツクるるカク人ヒトや万マン葉エフは八十ヤソ艘サウと
 修ツクる者八十ヤソ挺テイ立テ也二人フタヒト漕ソウ百挺ヒャクテイ立テ也コキ又ハ修ツクる者二百ニヒト人ヒト也

船を名けて船と云ふ大なる者長さ二十餘丈と云ふ水
 船を名けて船と云ふ大なる者長さ二十餘丈と云ふ水

とありと三四丈是と望八國のこゝ一六七百人物萬
斛と載はとるへうり
本朝應神天皇造らぬ船枯野舟長十丈とありハ是
中華又大船異と云ふ又云又元龜四年癸酉五月二十
二日從出丹羽長秀は舟をこれ佐和山の麓に松原に
て大船を造らむと大工の棟梁岡部又云あると云ふ者命と
義て舟の舟の長さ三十間横幅七間枓敷百挺と云ふ船
艘は矢庫と遠丈丈ありと鉄甲のこゝ一晝夜終て
急ぎ同七月五日は舟て舟又艘出来に又豊臣秀吉云
朝鮮責の時九鬼大隅守は保る船は浦邊にて後海
の船と造らぬ船と云ふ其内最大なりと云ふ船と云ふ

日本丸と号さるゝ又安宅丸と云ハ龍沢作りの大
船にて最長総ハ大船の鉄骨一七八十年の古き武
州の船系なりしと云老工ふきなり又船身ハ三層板金
屋の大津丸と云舟二の五板なりしと云和漢石板
の遠くハ横は云物方斛と載ると云者なりと又曰
他田三た海尉輝改播州姫路丹后城の時大船と造
らむ其長三町といつり其幅一丈七尺八寸也其
舟ハ入金舟入と據廢後其作三ヶ國は裸てや
ら船ら其船今三た海尉板と称さるゝと云倭人
王女今希ぬと云王清り作の百二十歩何
そ大なりとせん又徳金船軍美船は陳和郷と云

高は裸て後板は太船と造らむ作り終て中江
の候みほことりつと云といり是中華の人の下
知ふ條々却々其功と云ふことあり百有餘年
いふすゝ日本より中華と云は海海せー
舟なり是とミツスイス造りの舟と云ふと云へり
ありと云ハ日本と云はと云ふハ何れ大船と造る
何の船きことあらんや
本邦軍船と云へる兵家の秘事と云ふは其略と略
一其國と云は又水と云は機械船後本盟浮雲表
の式なりと云ふれども其れ名なきは是と云ふ天
船皮船破船は又云ふと云は是と云は軍船の別

その法ソノハフ規矩キコを造ツクる一和ワ漢カン其常トモツ子に用モチユる此の船を
 用アミタる者救ふ所り皆名救め載ノはるゝは此ニルを以て
 軍船クニセシよかりし所の者を捕ヒロひ集アツムる者也モノ

アタケ船は多々十餘艘より立カヲラ螺港をありし押
 上りしより又知智軍池は終て舟波五島島
 又終てこれに又なる圍舟なる事とあり武田は
 去の海賊殺小湊保家ハアタケ舟のようなる
 圍八圍の字はけと強せしと一利ありといへども
 非なり取法の事よ安宅と又阿武の字用し
 要船 其制大船は数すた廻船タウセン舟フナともあり
 又廻船タウセン舟フナともあり要船と云
 晉の陶侃運船トウカンと云戦艦セカンと云と云なり
 表御座船オモラゴザフネ 但徠先生鈐錄ケンラク曰世舟ハ武者なり旌ハタまとい
 と云天文の役人新録シンロクの傳云へり

將机舟シヤキ

口と云ハ大舟のクニ在船なり軍師シヤ儒者
 或ハ知識チシキの傳云へり

斥候舟セキコウ

字彙コク曰五百斛カッテ以上還有小屋曰斥候トテ以示
 敵進退也レンタイと云なり武備志カササは細校船センにて

哨探セウタンの用と云れハ中船小船と云へり

本邦ホンポウ小船と用物モノなる事なり船は口傳あり又
 謀船ボウセン 勘合船カンカフネとも云

羅舟ラフネ

伊藤氏イテウ目録メロクと云

先手船サキテ

檢使船ケンシ

射手舟イテ

并河船尾集

卷之五

三

大筒船

於辭の事^リ辭令^{シエニシ}軍の時十二艘の軍船より大
砲を多く軍のあはれに^{レホ}受け^ナて^ナ流^ナる

高^セく^ミ取^ミく^ミふ^ミす^ミく^ミ大^シ筒^{ツツ}船^{フネ}造^{ツク}り^ナ又^{マタ}

小船を引の
はつあり

駁船ハクセン

伊藤氏
イレビヤフ子
不火矢舟と續
ヨミ
ザリ

武備志水軍の法は隊毎に隊長ありて
タイゴト
タイキヤ
ハイリュ
 牌手

長鎗手
鉦兼火箭
神噐手
佛狼機
百子銳

鳥銳 管射鏢 火桶 罌の油 あり 後を平沈よ

炮録吹筒
投玉十ヶタマの役并とりけね甚々厭ふ

くまのけし

馬舟

使番船 ツカヒハシ

小荷駝船

兵糧舟 兵糧運送の舟又糧船とも云

棲樓船 セイロウ

大船は用又泊栖樓ツリセイロウを用何れも居たり

を平定し、昔をえより日本を攻取^{セム}時船

の舳ふは振擗のしく成櫃を數十丈まゝ立て

本の器を搦る人を業せうの如くようへ

とうき 約極様の起也 式用辨昭^{フヨウニリヤク}又陰^カ又月^{ツキ}又^セ治^イ務^イ

梯巧

タケタバ子
竹束船

竹束タテと云ハ竹タテを束カサく大盾モウシロの代カサは用モウシロ者

武田信玄カニニ此家臣ヨシクフタニ丹後コと云人始ハレメて是コレ

と作り今半竹束と云とより登壇必究ふ竹立
牌^{ハイ}より本邦の竹束と甚制一也山鹿^{ヤマカリウ}流は竹束
と作る云ふ亦是る法あり

梯子船 ハシコ 是舟也 舟の法ハ小船セウコウと大船オウセンの二
種あり又河の舟カハフネと海舟ウミフネの二種あり

タヘニ
疊舟
其法救ふ所り淺地をおり有^{コウコ}河海^{カカイ}又^{アラ}急^{スウ}を救へ^ス一^ニ新^{シン}知^チ惠^ヱ海^{カイ}

と云ふは皮を以て舟の形を作らばと云ふなり是
いふ事なり皮船と云ふへうなり

長持船
是も法を執りて四形^{シタシ}として舳^{シタロ}舻^ロを四に

梧櫟ロカイ之田又乃

或書ふ云令革^{ナレカ}て第^{カハ}の四^{カハ}はたて^{カハ}て込^{カハ}第^{カハ}は例^{カハ}ハ

のとく 毎座と船の底の華ハ船例とあり又
 第の四ハ木橋ナリて是と船梁と一形状の柱
 と以蓋ハ座形乃座縁と船の棹ハ遠目鏡の鞘のよ
 とくし引のをすこハ櫓^ロと櫂^{カイ}也も列とるへり

動突舟 ドウツキ
後を平化^{クダク}は曰大船の舟後はおくけふ處
を碇^{カキ}とふく^{カチモノ}り^{ニキ}艦先^ハを^{ニキ}張^ハぬ^ハく^ハく^ハを^ハ堅^ハ固^ハ

船陽船と云ふ者何りシケンセンシウ 伝言全書又云船陽船イシヤツ 覆船何りフク
 盲船メクラ 後を平化し又盲船行圍板囊といふり此舟を

兵家水軍秘藏の秘事と云

亀甲船

朝鮮の李舜臣と云者造り船
本邦れ盲船の〜いり板を厚くはきて
船上の屋縁は葺き其船の甲の〜
皆その内よりこれ仰ふも後た云はく火砲を
備とて〜しり云々とも 本邦の亀甲船ハ
こそ制異也是又水軍秘藏の極秘と云
小船也大海より出て大浪お超して沈〜
なく独風波を去のきり有

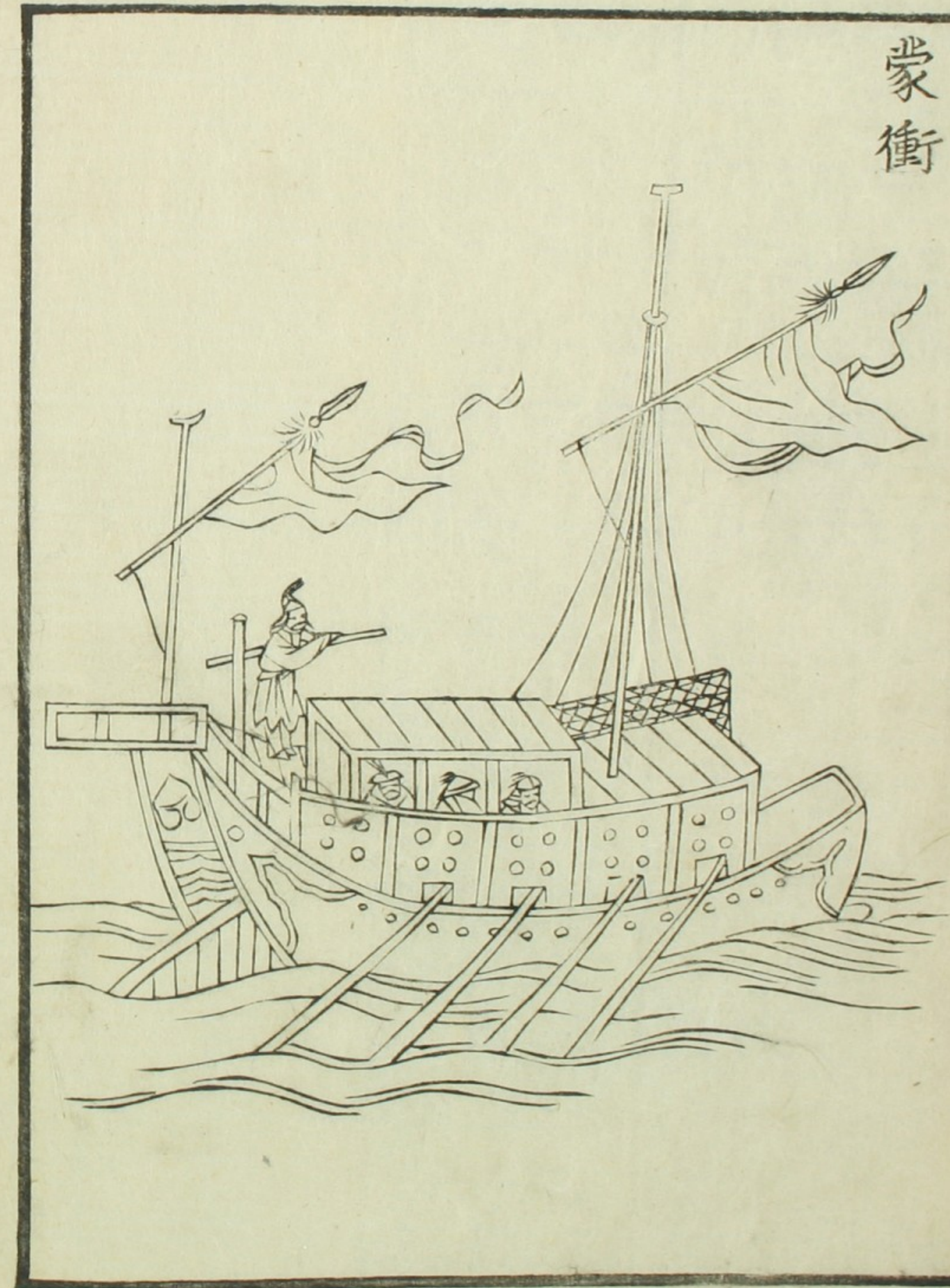
水中船

是も小船〜と波〜より〜
羽と云又一書は曰阿蘭陀舟を造りこの

蒙衝

舟ハ水底を潜り舟より其外側をチヤン塗はし
硝石を以て船と云ふといふチヤン塗はまゝ阿蘭
陀舟と云ふも其底を潜りハ是藏の水中船也又其
の制水中と云舟の一法有り
蒙衝 舟ハ半の皮〜〜〜と云云と棹乃
穴を巧け矢石もや〜〜〜と云云と後た云
ハハス火矢雲と云一の穴有り敵を射と云ハ矢
石と云〜〜〜と云云大船を引ひと〜〜と云
舟を造り

蒙衝



鵠舩

武備志云鵠舩千艘載士を載以ていり梁王僧
弁傳云曰鵠舩其中戦士を載以てあるは悉く八十
棹棹半皆越人といふなり 本邦八十桹立と
云ふものなり

三翼

駱賓王集云三翼は陽侯七令云曰浮三翼注
は越絶書伍子胥水戦兵法内經云曰

- | | | |
|------|---------|-------|
| 大翼一艘 | 廣一丈五尺二寸 | 長十丈 |
| 中翼一艘 | 廣一丈三尺五寸 | 長九丈六尺 |
| 小翼一艘 | 廣一丈二尺 | 長九丈 |
| 突昌船 | | |
| 大艦 | | |

手以爲舟用食

六

五樓船

五層樓イカロウと云々者大艦オホタナの形なり吳志コシに曰
曲マカ公濡須ジュシュに出孫權ソンケン董襲トウシヤ督トクとて五樓

船フナ 濡シユ 須シユ 口マ よとめーむとろろ

樓船ロウセン

けあやくをえきよかきて戦格とつて

旗のりを立勢窓りと出しをりけふ

を種革より色より火器をふせき砲又ハ播石銃

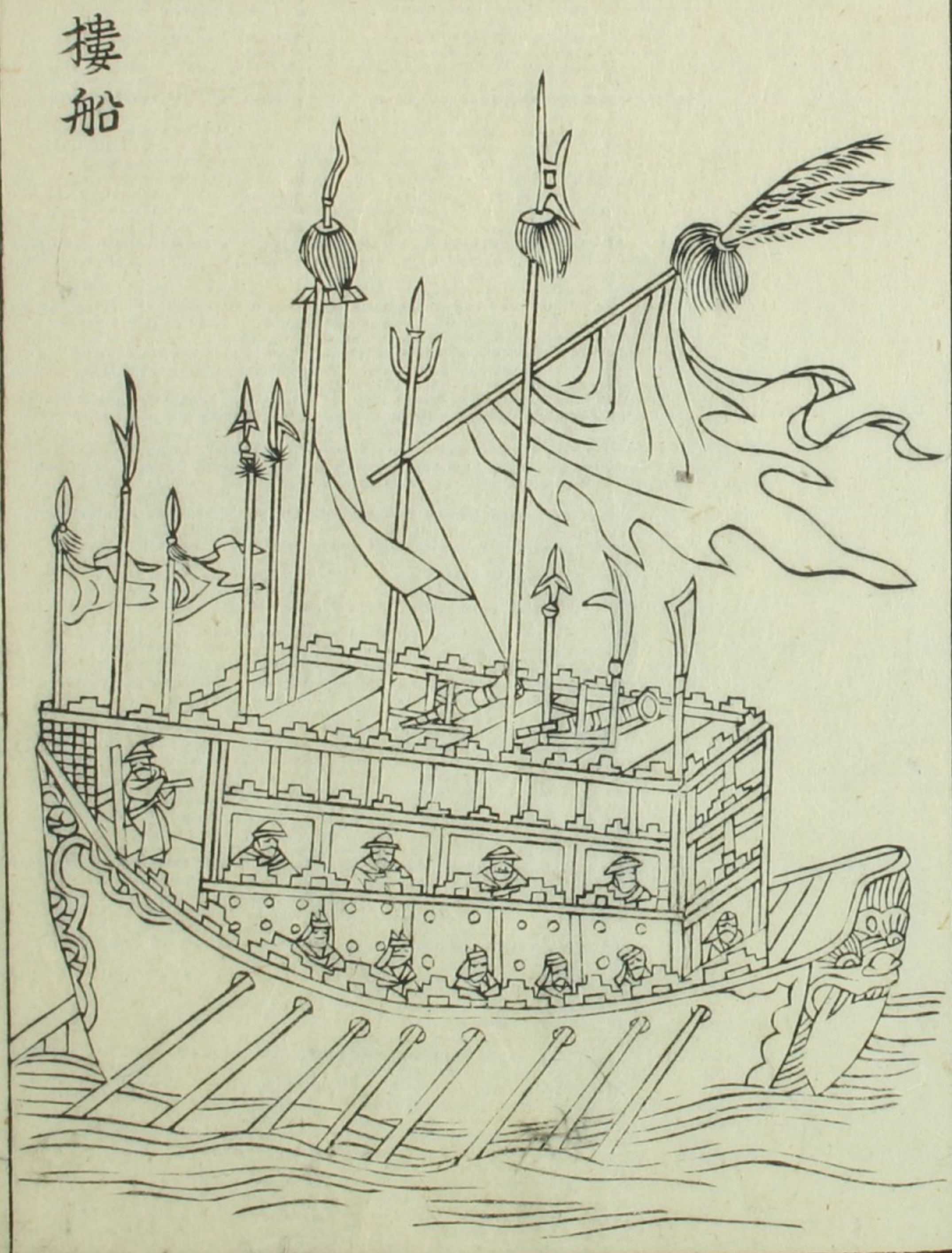
汁をおく、至水城郭のこゝ、至長六車とく

うせふと馳す志う遠くも大風又逢ふ人か

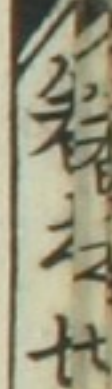
と割く用となす所を水軍と

用く形勢とて軍威とてあはれは

没多入八



孫少舟所集



舸の如く^{ヒメヲキ}くあきみ^{セシ}裁^ツにけ^{一ニカラ}舟ハ舸^ツの如^ツく

女ヒメ牆ツキと立あまほくセンソツ幾卒武勇の害と
一ニカラ

多んくきとむ舟の往返
ユキカヘリトガ
 飛くくく
キシユ
 合敷を

ウチハタ
お旗をかきうきうき

字彙曰四方ホコノイタラ施板以禦フセグ矢者又上下板ヤラと云

如を艦と云

勝王閣序

日本紀

列仙傳

吳都賦

宋^{ソウ}の呉^ゴ喜^キ弩^{トウ}皮^ヒ艦^{カン}を以^{もつ}て
樓^{ロウ}船^コを攻^カむに

胡三省曰牛皮を以て船を冒して矢石をふせく
固く是を皮艦と云

大艦 拍竿と有り者大艦の上より下へはけり其層樓を
仰ぐ者百尺六拍竿を並置し其サ又十尺幾

七八百人旗幟をよぎて幾の如く故船は逼る所ハ拍竿
を發す者も船舳皆くくくくくくく

國艦 けふハ船うものより女牆を設けたりくは垣の
下は棹の穴を開き又船の内よりサ又尺の櫓を立て

女牆といひくく櫓のより又女牆を立戦士を列上
は度りくおはちる牙旗を立令敷く

國艦



青龍艦

白虎艦

梁史曰王僧辨湘州の賊陸納青龍艦白虎艦を造り
衣さるふ牛皮を以てするサナミと云へり

八槽艦

盧循新舩八槽艦を九枚作りよは四層を造り
さす十餘丈

飛虎艦

野猪艦

挾電艦

王琳將張平宅と云る戦船毎に多量の艦は
聲なり其船の……なつては時船艦と云ふ
洞真記曰昆靈地
の中より……あり

芙蓉艦

沒突艦

哨船

金翅

簡文曰王軸芙蓉舟と云り蕭方等三十国
春秋曰盧循寇京邑……千餘艘
梁の裴邃邵陽州を征す經人長橋をついて
……邃壘と築構は逼る密より……を化
……淮水暴溢……あて艦を……て橋の……は
……魏衆驚つる邃橋……追ふた……を……
武備志曰卿大夫兵所駕者正字通曰云今
兵卒偵巡の者……て……と云
……と……兵……一萬金翅三百艘といふ……
……哨船……一……金翅……と……を……迅疾……
……あり

輪舫

後平化は輪舫はハ急輪の水弾火生獨を
用とて人々より後軍は連舫踰萬艘迄ハ六韜
又曰武王紂を伐時河は出呂尚右將より四十七
艘の舫といふ河を踰とて人々より

飛鷲

蒼鷹

赤雀

鐵軸

牙檣

戈船

以上五名唐類函は戎船の名とて人々より
牙檣又用具檣のトよとて人々より
呉都賦は戈船ハ船下は戈也越絶書は云

五子胥の如く戈あり武備志は曰戈船を云々
又とて二隻とあるの原は蓋一艘ハ中流より
とめ後兵をくく一戎を待て二艘ハ小港よりして
さうさうさうは海

海船

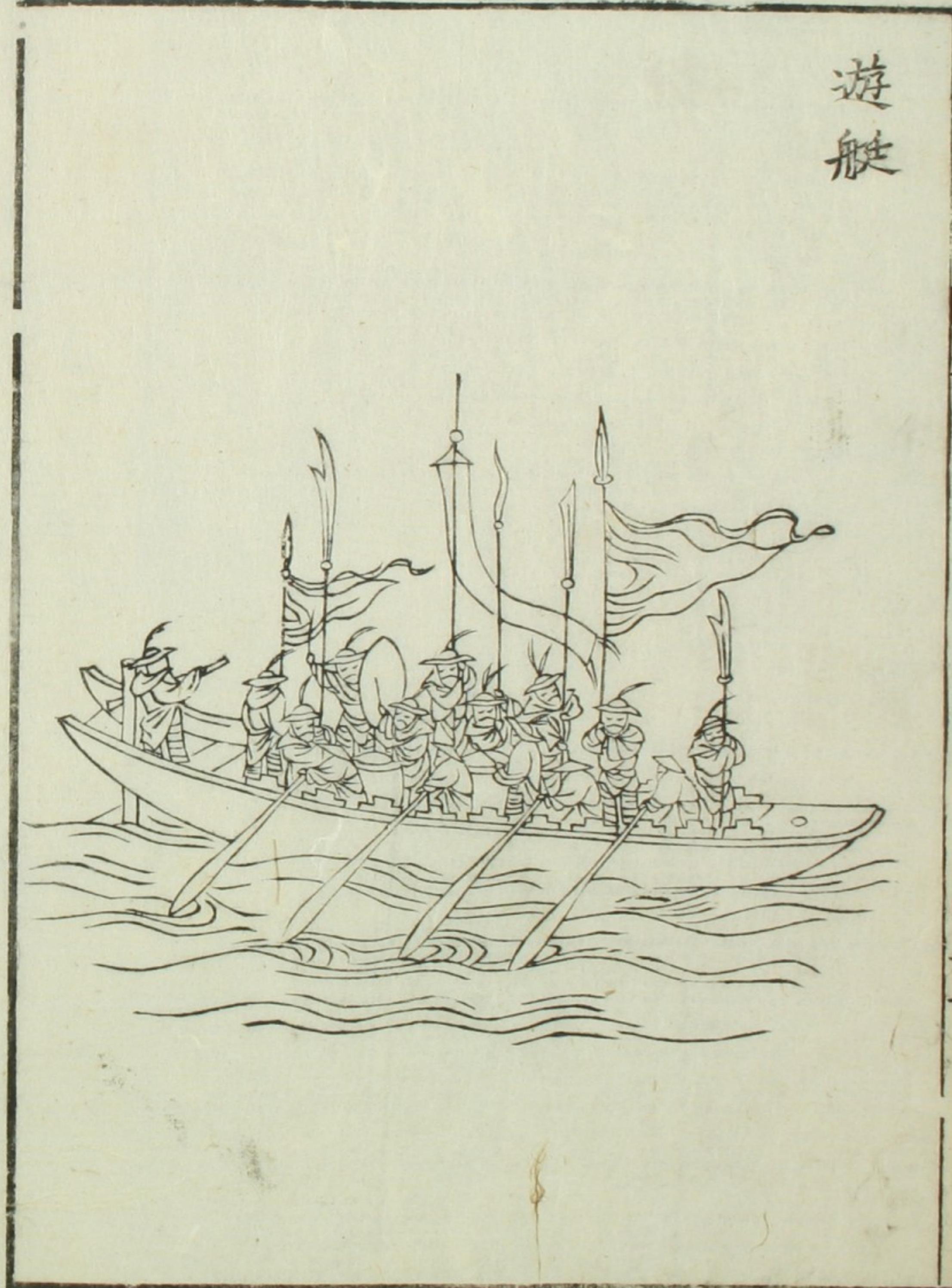
水師傳は曰海船のハ前洞といふきよは
弩樓を列式は志は海船船をハ款舟をつく

といふ又虞允文とて云者海船船を用く戎て大
さ来るハ捷とて人々より又海船の如きもの

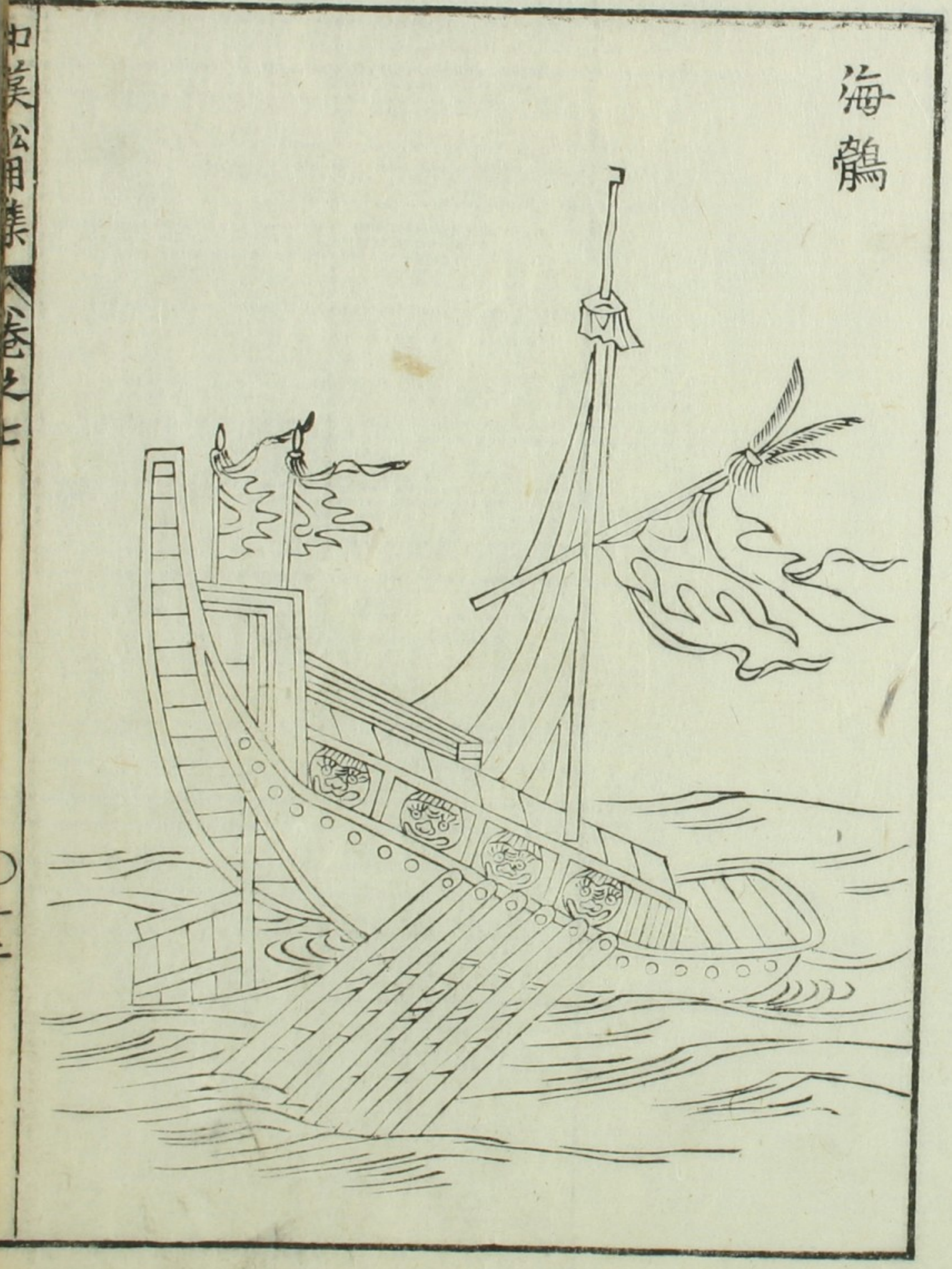
遊艇

は舟ハ女牆をハ船上を將林とて人々より
たぐハ大小ハ短四尺一林會進止回軍轉
陳其疾と如風虞候是を用といふ

遊艇



海鷗



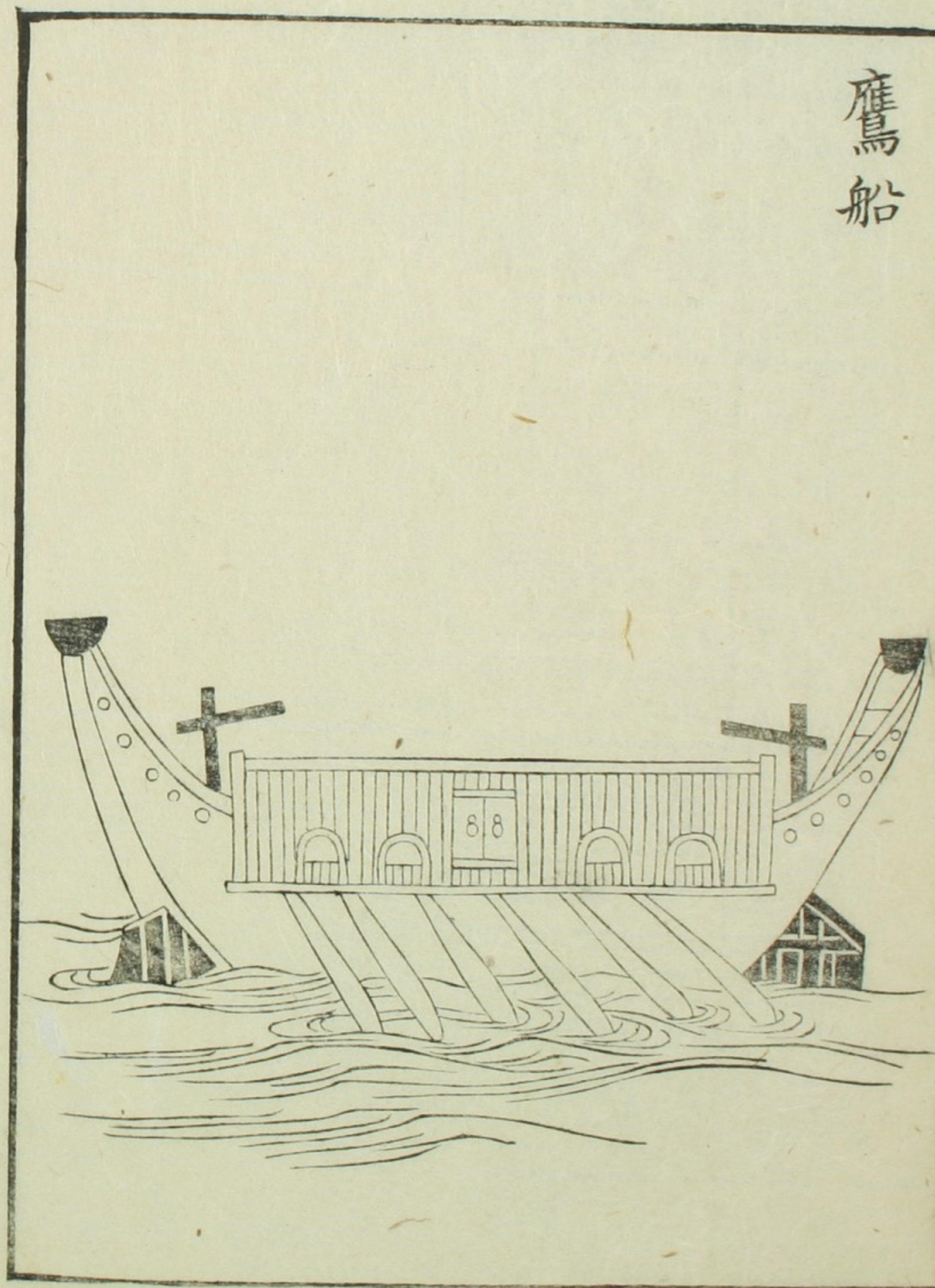
海鵲 カイコツ

け舟のうしろかゝらひきく尾ヲタカくふの方
 大きな後ハシロ小く鵲ハヤフサのうしろ乃々ハヤフサ船フネの
 上ハヤフサ名は波板ハヤフサをあゝかゝら鵲ハヤフサの翼ヨクシ翅ハネの
 しくそ舟を廻タスく風浪怒張フタウドナヤウといふもくむき
 かむくこれ背セナカ名牛皮キウヒをんゝあゝ
 城シロのうしろを牙旗ケキ金鼓キンコの法ホウのうしろ
 は曰エツビン越人水鏡スイセンは海鵲カイコツ行ユキを穿ヤカチて急浪キウリウ浪ナミ
 浪ナミは腐フホれに列トウロ棠トウあり油棠サトウの油アブラまゝうに
 といふ

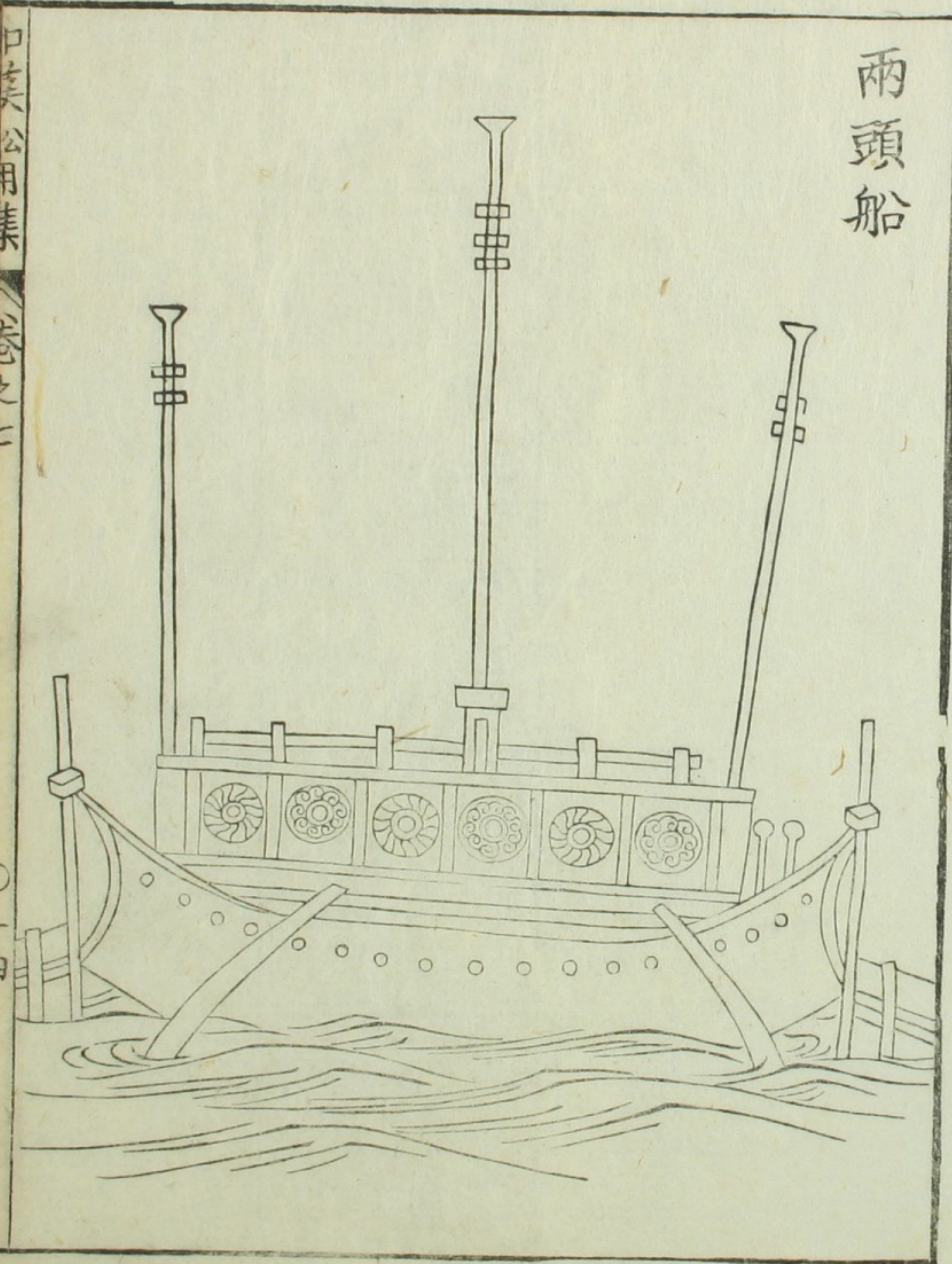
鷹船 ヨウ 舟スウメイハ棠サセンの油アブラとすゝ人ヒト越エへ一ヒト組グミと

小壘ヨウハイ敵テキをけちゝ火器クハキ矢ヤをふせきうゝ一ヒト舟フネ
 ぬれのともしきの時トキはふく首尾シュビをまき入イルと
 進退シンタイあゝゝ其リヤウあゝヘン葉ハ竹チク板ハン密ミツ釘テイとて
 福船カタハラフネの舟フネのうしろのうしろ竹チクのうしろは窓マドとす
 ふけ銃エーセン竿サウを出デ窓マドは船フネの舟フネ人ヒトをくゝ
 望遠トウエン望遠トウエン望遠トウエン望遠トウエン望遠トウエン望遠トウエン望遠トウエン
 隊中タイチュウは入イル小城コウジヤウさう中ナカとあゝりて都ミヤコく海ウミ船フネと
 入イルはあゝりて都ミヤコく海ウミ船フネと
 入イルはあゝりて都ミヤコく海ウミ船フネと
 入イルはあゝりて都ミヤコく海ウミ船フネと

鷹船



兩頭船



リヤウトウ
兩頭船

茅元儀の曰大學衍義補母あ頭船の

從^{セシ}り^{テシ}た^シ海^{カイ}運^{ウン}の^シ船^{セン}大^{ダイ}く^クて^テ風^{フウ}

遇^{アヲ}
ハ旋^{セン}轉^{テン}
一
カシ

制サて東風ハ又遇アハ西ハ又ア世南風ハ又ア時ア、

小は弛海中の痛船其利と申る者なり武備を

くきゝろす 慮患リヨクハシトシ遠きをさすことけとをほし

モフケ
モメ
イウシ

を設くもひ者なりひさるゝ何んやこれ

多々乱三ナル一

蜈蚣船
い舟を解
蜈蚣
ムカデ

より始る佛^{フツ}部^{ロウ}幾^キ銳^{エイ}々の^ヲモ^モき者子^コ行^{コウ}小^{コウ}如^{ニョウ}者

百五十斤を弩カタ以て主た法は此こ烈れつ也なり本もと石いし鋼こうといふは色いろ

おりクダ砕くろとろふれろくろとろほも

ホニライセイテン
雷制手電

勢^{イキマヒ}はより疾^{トキ}く如く神も速^{ツラ}くまゝけり島^{トウ}

夷イの長枝也ニル其法中國ハウセンより傳ワケく是を引ヒキく夷狄

又、馭およそ火攻の具砲お陰、速これよくハふと

嘉清四年始て造れどもは十二年の万敷

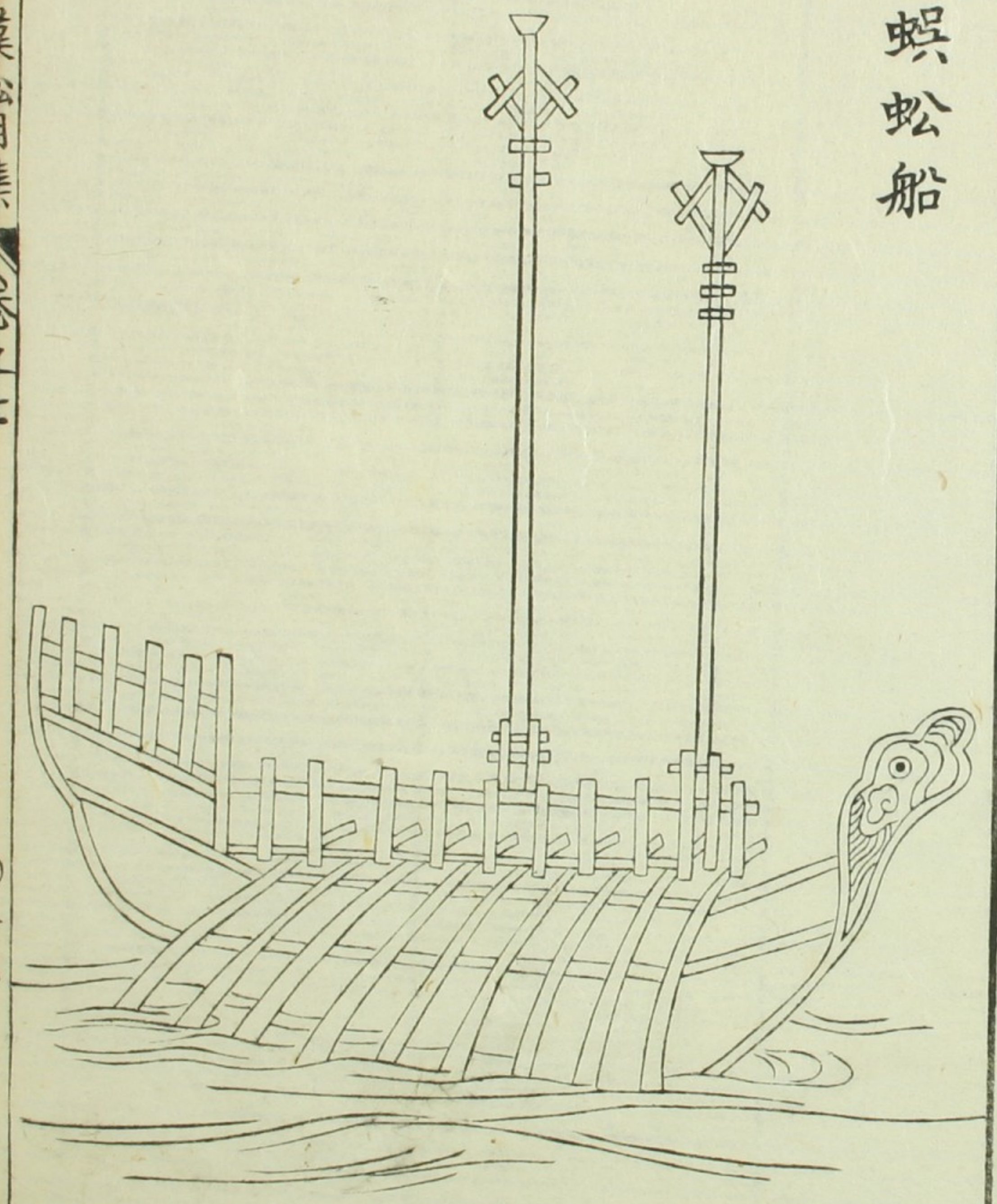
年法よくして功司の大なることを知る也

萬世新也ニシセイ子ガフトヨ
長也チヤウジャ
力也イキホヒ
とてエカ画くヘラスをスるル夷の制義也

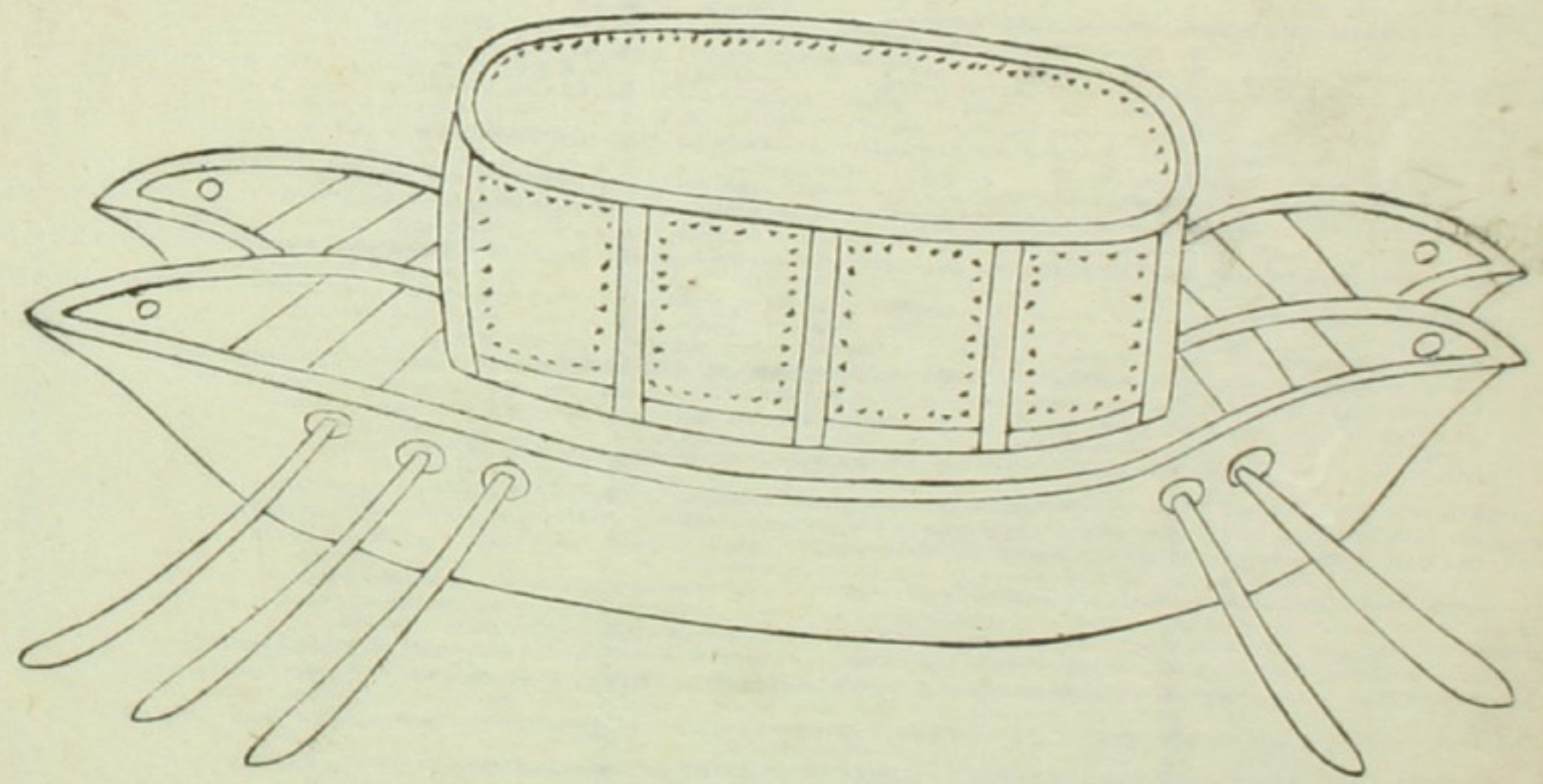
萬世の爲めとして書くべきこと

蜈蚣の制それよりおとろろろ器は必すくたをね
 してこれと以てくすの
 海江と甚すやうして遅者ハ風は開くたへ
 大食國ハ漳州の東南より毎歳の番舟必その
 西水の風登よりて去る友の初東南の風よりて
 来る波よりハ中海風よりて初へくたへて佛
 郎機蜈蚣船とより面ひろくあるは機軸十とつ
 ねそのとをわくとして傾度の患よりね其刻
 はあて造る風暴作れ風怒號の外有るは逆皆
 りへて流や海中を航するは流なることとて
 一日はなんをるく百里とよりさへさへんや

蜈蚣船



鴛鴦漿船



鴛鴦漿船

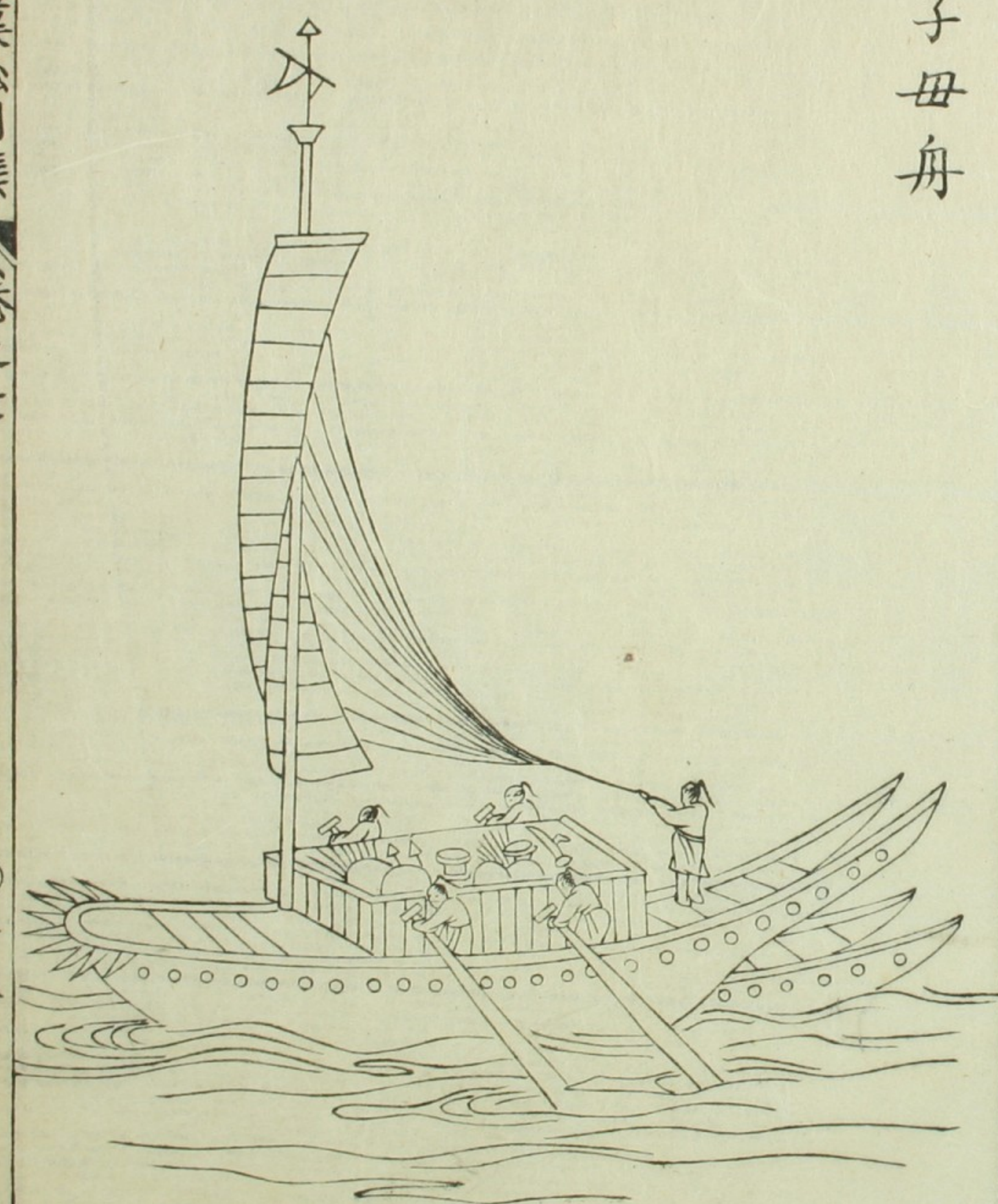
鴛鴦漿船 鴛鴦漿船ハ舟二艘を用一室ニヤ
 船の二艘を並べて一室をなす。船の
 長サ三丈八尺廣サ九尺餘上を坐半の皮を張つて
 兵衛勇士とおさあつて。櫓槳毎色八挺餘の旁
 には茶腹をひききかきし。舟ハ神志を放ちて
 舟とてさうさう変て攻る時ハ舟のたふたふと
 賊を破れん

子母舟

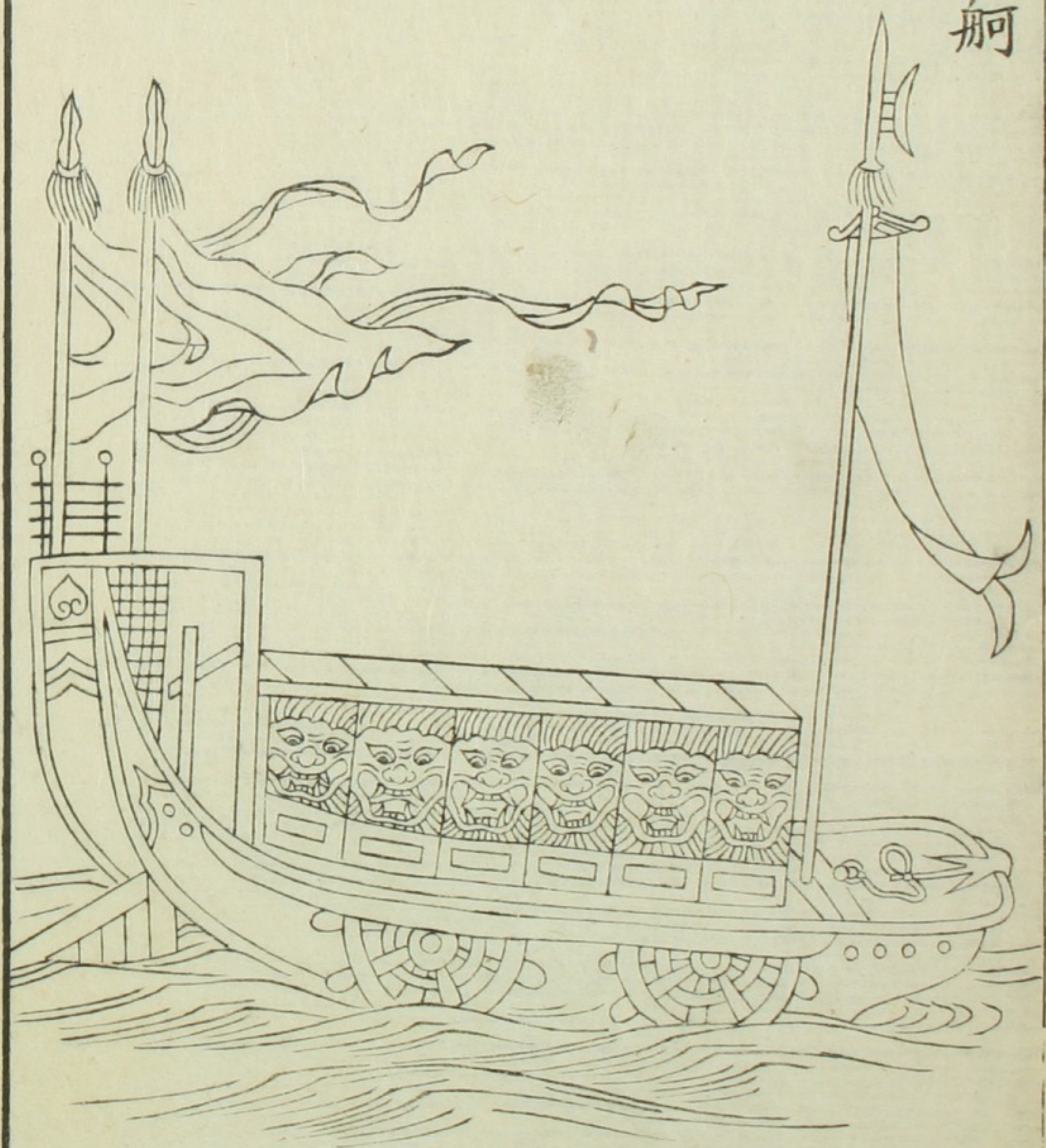
子母舟 けふのハサニ丈八尺ハ二丈ハ艦船様
 の二艘を並べて一室をなす。船の
 長サ三丈八尺廣サ九尺餘上を坐半の皮を張つて
 兵衛勇士とおさあつて。櫓槳毎色八挺餘の旁
 には茶腹をひききかきし。舟ハ神志を放ちて
 舟とてさうさう変て攻る時ハ舟のたふたふと
 賊を破れん

おろしあき日^{リヤウ}掉^{レタウ}あ^ニの母^ホ船^{セン}風^{フウ}とて掉^{トウ}將^{シヤウ}本^{ポン}を
 送^{ソウ}く^クむ^ムあ^ニの船^{セン}内^{ナイ}は茅^{カヤ}薪^{タキバ}油^{アブラ}麻^{アサ}と装^{ヨウ}く^クそ^ソ
 い^テ火^カ薬^{ヤク}祖^ソ縁^{エン}とす^スへ^ヘつ^ツぬ^ヌき^キ船^{セン}の^ノあ^ニあ^ニ娘^{ニヤ}と^トも^モに^ニ
 後^コ牙^ガ打^テ錠^{テイ}と^ト羽^ハ皆^{カミ}網^{カミ}の^ノさ^サら^ラと^トき^キ快^{カイ}利^リと^ト用^{ヨウ}む^ムへ^ヘと^ト
 彼^カ身^ミよ^ヨい^イつ^ツり^リ船^{セン}内^{ナイ}より^{ヨリ}釣^{テウ}拒^{キョ}掉^{タウ}と^ト發^{ハツ}て^テる^ルハ
 と^トい^イく^クの^ノ身^ミと^ト一^{イチ}変^{ヘン}と^トお^オ連^{レン}の^ノ先^{セン}船^{セン}上^{ジョウ}は^ハゆ^ユら^ラ
 くと^トあ^ニあ^ニる^ルに^ニと^トき^キ我^ガ母^ボ船^{セン}又^{マタ}火^カを^ヲ発^{ハツ}て^テ
 う^ウれ^レと^トも^モに^ニあ^ニる^ル人^{ヒト}焚^{ヤキ}我^ガ軍^{グン}あ^ニる^ル人^{ヒト}又^{マタ}用^{ヨウ}く^ク子^コ
 船^{セン}は^ハあ^ニる^ルて^テう^ウく^クへ^ヘ

子母舟



車輪舸



車輪舸

け每ハ長四丈二尺廣さ一丈三尺外通虚
 へニキヤウ
 して各櫃各一尺空内は四輪をりけ輪頭水
 へニキヤウ
 に入と給して一尺人をりて船をせむりてあ
 へニキヤウ
 船の前たつふ長さ八尺中餘長二丈七尺
 後尾長七尺と柜樓と餘上の内は居りてあ
 へニキヤウ
 又毎一大梁蓋板をりてあをより下に伏
 へニキヤウ
 以毎一堀長又八廣さ二尺下に輪軸をあ
 へニキヤウ
 雲のくくく款母のそんく先内より神祇神象神
 火をとり彼るくくくく款母をくくくく
 け我軍一齊ハ船板をりてあをより下に伏
 へニキヤウ
 と餘とけりて俱は生半の皮をりて張つむ

人内ふ立て火絙とちけりし船をりけり船をりけり船をりけり

馳馬

崔豹古今注曰孫權名小船為馳馬

飛馬

江表傳曰孫權船名分て馬と云言ハ飛をりけるの地を走りける

龍舟

魏の曹丕呉を攻る時舟十艘と造り其長さ二十余丈とて二千余人を容へ名分て龍舟と云

飛龍船

黃黑龍船

氏備志曰黃黑龍船數千艘と造ると云り

赤龍舟

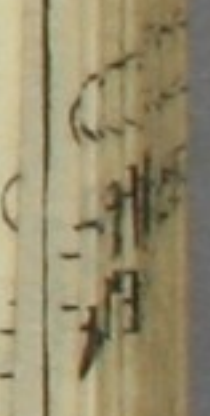


セキリヤウ
赤龍舟

龍舟^{リヤウ} いふハ形龍^{カク}は像^{カク}を以て三層^{ソウ}をつくり、口^{ヒラ}を突き兵一名といれり賊の初掃^{ソウ}をうぐり皆竹片^{チタ}菱角^{ヘンリヤウ}釘^{テイ}縫^{キナ}を用いて堅確^{ケンシツ}なりと云ふは狗^コは一小門^{シヤウモン}を用鉄板^{ヒツキ}を覆てたに中層^{ソウ}の船中^{フナナカ}間^マを放^{ハナチ}て一井口^{ハイコウ}を開く是初^{サウ}は西^{サイ}火器^{カキ}を発^{ハツ}しあ旁^{リヤウ}は兵一名を用ゝ櫓^{カダ}をつくり又舷木^{セナギ}を用てあ架^{リヤウカ}を造^{ツクリ}て舟^{フナ}れ蓋^{フタ}をさへおに火器^{カキ}をつくり舟底^{フナソコ}筋骨^{スネボネ}を造^{ツク}り中^{ナカ}を空^{カラ}して機括^{キグツ}を用鉄^{テツ}を以て是を鑿^{ヨット}す風濤^{フウトウ}も沈^{シヅム}め溺^{ユホラ}れんとすべし

いふは又一橈帆^{リョウハン}を立ふは一窓^{ソウ}を用兵一名を用て

程海集



中興公用集

わたり葉置ぬと火を仕りて款船の當中へ

油船 ゴレキ 呉歴又曰曹公濡須にお仲船を修く款

濡須 ジュシュ 例の上を後孫權自末て艦舟よきて

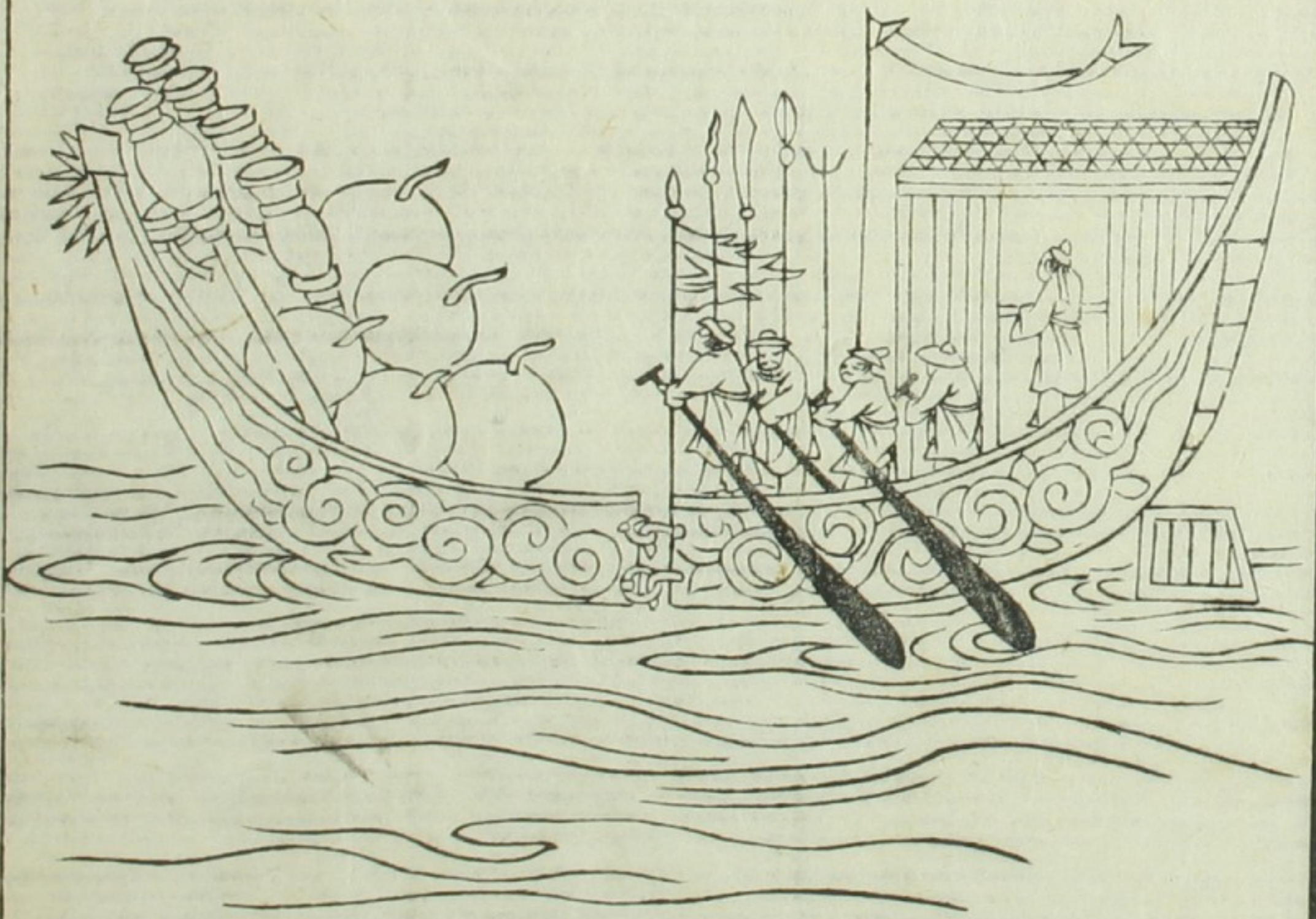
火船 イセ 弊船或ハ筏を用ゝる薪を積載

火 クハヤク 火を仕りけ風より流るるを以て

聯環舟 レンクワン 舟の長サ四丈許外又是を二艘ハ一舟

の二艘ハ二舟とありあの舟ハ三分

連環舟



既濟雷

是ハ長一尺五寸より一寸半。大砲を發して發せし船底は水内は送來二斤を要む

藥候盤砲よりより大砲彈重さ二斤なりを

放り黃旗を用くを却て物皮一張を用く袋

中縫砲をつむ居中四足なりは雜續釘を用紙

毎の應れ上一舟毎に砲八箇を用考む

砲發は船底これよりけ別舟焼む紙中補ふ

とて

膠舟

史記曰昭王南巡狩してより江に膠舟は年すふ義は曰帝王世紀云昭王德襄南征して漢をより船人足と要んる船は膠と

王はより王船は沸す中流より膠とかけ船

解王及祭公ともは中は役して船に

通俗文は曰周の昭王楚に熊廉を攻んとん楚の謀

士張策は曰今匠人は課て大は王舟を作り黄膠

を以て船と縫合させ渾水の口小用を以て君を天

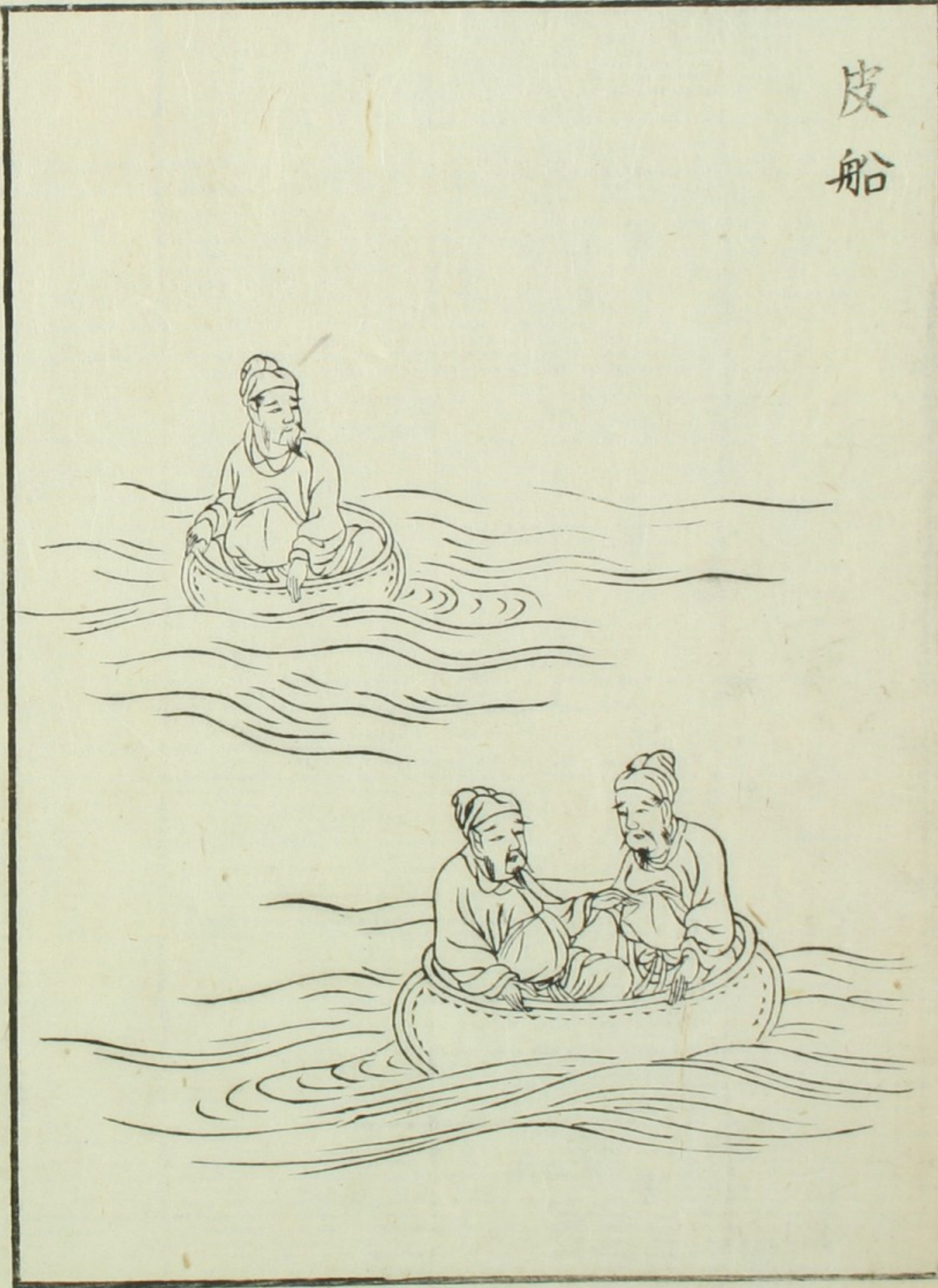
子と送り波舟はよりんを渡す天子

舟はよりよりかの黄膠水のよりん楚の謀

天子船ともは中流は溺よりん楚の謀

後とよりより

皮船



皮船

是ハ生牛馬皮を用竹木を以て縁と成形第
乃々火を以て毛を乾し水より一皮
舩一人を乗すへ一皮舩あるを縫てより三人
を乗す竿を以木を繋ぎを舩てさふあやうなり

革船

東觀漢記曰革を縫て船と成形第一は乗る
以て河を渡し掩繋と云へり

瓜皮船

王濬集云瓜皮船本圖倉卒といふ是を
用款境は深く入へりといふ

艚

呂蒙尋陽に在りて盡其精兵を艚の中へ伏
せし白衣を以て榜を揺るむといふは舟楫
章と云れり

云々百餘里艦大船と云ふ所と云ふ所又

飛雲舟

蒼隼船

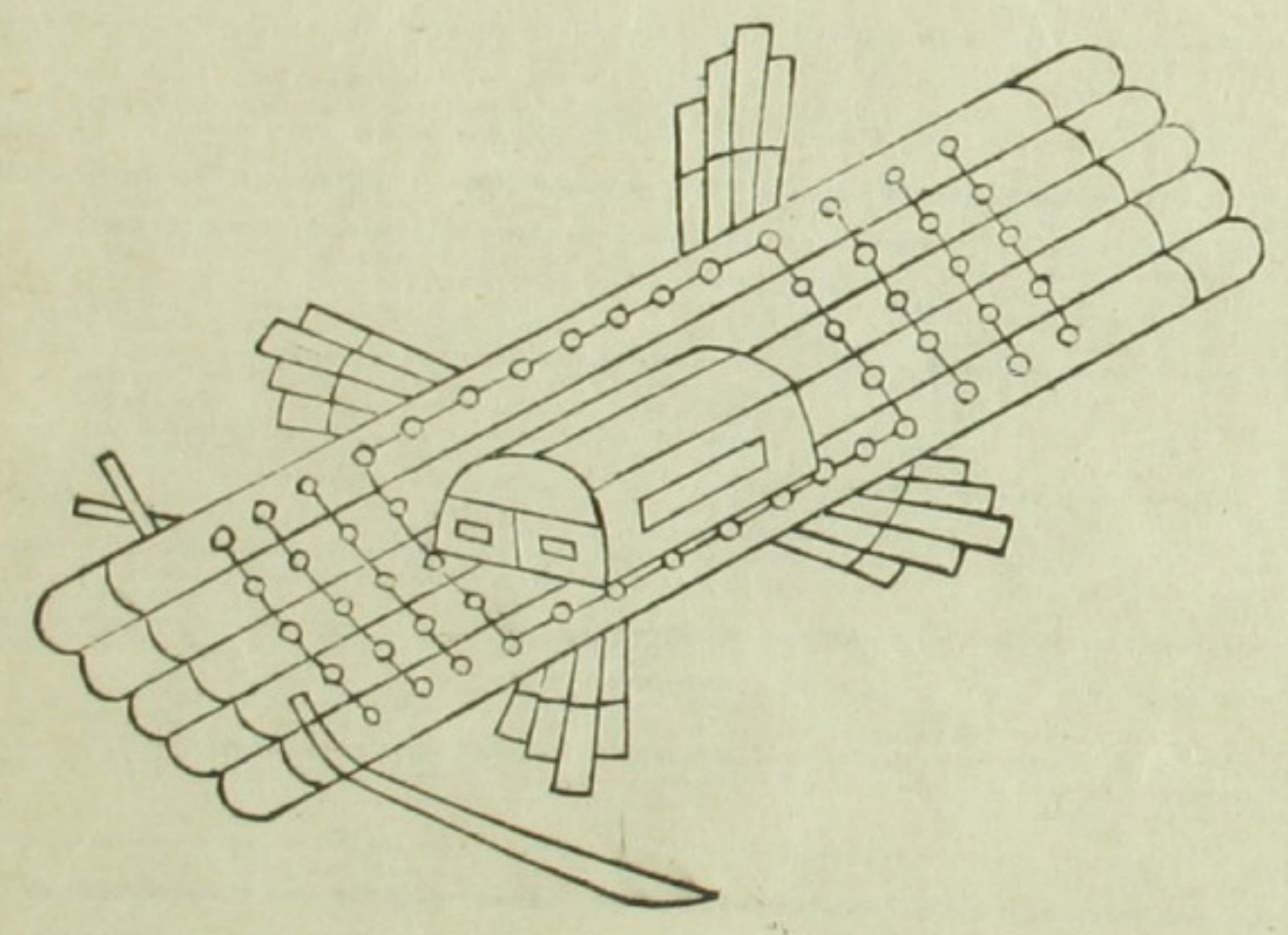
金船

先登船

飛鳥船

晉令は白水殿は飛雲舟あり相去ると四十歩
蒼隼船相去ると四十歩金船相去ると二十歩
小兒先登船飛鳥船相去ると二十歩又へり

破船筏



破船後

是ハ大本五根を用各長さ三丈船より板を
いゝ平うゝ一船所麻填縫釘してまうゝ
仲のよりをいゝお後は串一處あるは四端を船中
の船をいゝ輪軸内よりありてうゝれあるはふ
のこは破舟等れをいゝおのれと水とお平に
け割船をいゝおれして使あり

天船

後を平に天子親の天候といふるを六
韜軍用は曰大水と海は是の廣さ一丈又
天長さ二丈はとちり者八具環利の通索をいゝ
是と張天津鉄機浪内と組あり外と圓すまう
是八具環機おのりゝ割三十二具天候をいゝ

是はと張大海と海は是と天候と一具又天
船と云

和漢船用集卷第七終

